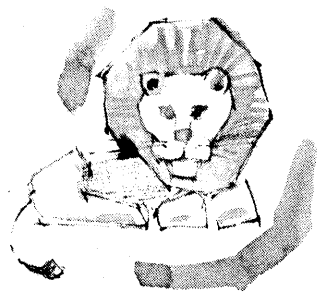


## こんな本 あんな本



### 小島直美

本を紹介するにはあまりに不勉強

てきました。

な自分にあらかじめ恥じ入りながら、

そんなことを考えながらその場に立

徐々に本屋さんによってみました。行

ちどまってしまった私が手にしたのは、

ってみて、子どもの本のコーナーが広

ちよっと変わった絵本でした。「ふなひ

がったこと、そしてその中の大きな部

き太良」(儀間比呂志 作・絵)という

分に、色鮮かなとび出す絵本」だの

沖繩の絵本なんです。といっても、沖

まんがに近いものなどの目立つ本が、

縄の民話でなく創作のようです。

いっぱいあるのにびっくりしてしまい

飢饉の時に拾われた赤ん坊が「太良」

ました。「ぼくね、仮面ライダーの本も

と名付けられて、とても大きく育った

ってるよ」「ぼくだって、」と男の子

のですがちっとも働かず寝てばかりい

たちが話しあっている本なんだな、と

るのです。そして、ある時台風に襲わ

思いながら、そしてテレビによってウ

れて食べ物もなくなったのに薩摩の役

ルトランマンだのスペクトルマンだの仮

人が年貢をとりたてに来ました。困っ

面ライダーだの、今度はミラーマン、

た村人からわけを聞いて太良は海には

とどんどん新しい興味を作り出され、

いって役人の船をひっぱって陸にあげ

本もそれを追って新しいものが出て、

るんです。生命の力をふりしぼって船

こんな中でよくいわれることながら、

をひきあげると太良は力つきて大きな

本当に良い本を与えるということとはむ

音を響かせて丘に倒れ岩となってしま

ずかしいことなんだな、と痛切に感じ

うのです。沖繩のもつ苦しい悲しい歴

史を感じさせ、その中で祈るように願っている神の力のようなものの出現が、力強いだけにより悲しさを感じさせるような本です。たくましく追力がありすぎて、だから悲しい沖繩の心がジーンと感じられる本です。

「あぬやあ、むかし むかしのはなしやし。おきなわの みなみの村に がし、(ききん) があってね。」と語り出され、太良が船をひきはじめる。「いかりづなを つかんだ太良は、か

おをまっかつかにして、ふねを ひきはじめたわけよ。あれだけの ずうたいで ひっぱるから、ふねは すこしずつ うごきだしてねえ。……よいし よいし よいし よいし ふねは ひとひきごとに、はまにちかづいてくるのさ。」と静かに語り続けられます。そして、版面にあっさりと色づけられた絵が、何よりもその力を感じさせてく

れるのです。おともも楽しめる絵本です。むしろおとな向きな気もします。

でも、年長組の子どもたちぐらいにはせめてこの沖繩という島のかない民話のふんい気を感じさせたい気もします。絵本っていろいろな読み方があると思います。いろいろな与え方があります。この絵本なんかはどんなふうにか、なんだかむずかしい気がしています。

幼稚園で私は時々絵本を読んであげます。太良の本のご紹介をさせていた

だきたくなりました。夏休みのあと、「機関車に乗ったんだよ」と得意げに話している男の子がいました。その数日後、バートンの「いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう」を読みました。十人ぐらいの男の

子たちは、どんどんお話に引きこまれています。いたずらな機関車のちゅうちゅうがひとり逃げだして、駅を

通過し、踏切で自動車を急停車させ、あいているはねばしをとびこえ、それでもひとりで走っていきます。もう止まらないんです。そして二つにわかれている線路にさしかかってどちらにいか迷っている時、他の場所で遊んでいた子どもの用でその場を立たなければならなくなり、少しいじわるに「このつづきはもう少しあとのオタノシミ」と本も持って行きました。

ところが、ふだんならもう散っちゃいそうなそのグループがちゃんと待っていたのです。それも「ちゅうちゅうはどうしただろう」と話しながら。

十一月には幼稚園でうさぎの赤ちゃんが生まれました。その親うさぎたち

が来たころ「しろいうさぎとくろいうさぎ」(ガース・ウィリアムズ)を読んだ子どもたちが、うさぎのほのぼのとした愛をそれぞれの心に残していたのでしよう。オメデタのニュースに「パパとママになるんだね」「よかったね」と本当にうれしそうに話していました。自分たちのうさぎへの気持に、うさぎ同士の愛がはねかえっているような子どもたちのようでした。

「はるかしがりやのぞう」(つかさおさむ)というお話がありました。恥ずかしがりやのぞうの子が、恥ずかしいと思ったり、コンプレックスを感じたりするたびからだまでがよけい小さく縮んだりするのです。けれども、きれいな花のおいを、鼻を思いきりりばして吸いこんだり、その鼻で水あび

をしているところを他の動物にほめられたりして、だんだんに勇気を得るお話です。やわらかなデッサンタッチの絵に淡い美しい色がついています。その子の気持がとてもよく絵にあらわれているのです。この本を恥ずかしがりやの女の子が気に入りました。時々お友だちからはなれてひとりになると、その本を開いてじっと見つめている姿が何回か見られました。

三歳の組の時、ちょうどもうすぐ春という時、「はなをくんくん」(ルース・クラウス文・サイモント絵)をおへやで読んであげました。いろいろな動物の眠りと目覚めと動きのくりかえしが楽しいらしく、そしてみんなが一点に向かって走っていく動きが子どもたちの心の動きを上手に誘って、ゆきのなかにおはながひとつさいているぞ!という

イラストの動物たちの喜びの表情が子どもたちの顔にもあらわれていました。この子に、今、どんな本を与えたらいいか、それによって本が生き、その子の友だちにもなり得るのです。絵本が本当に子どもたちの心の中に生きるような与え方をしたいと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)